

編集後記

編集委員

委員長

藤田郁代

副委員長

立石雅子

宇野彰

勝木準

熊倉勇美

倉内紀子

小林範子

城間将江

関啓子

玉井ふみ

深浦順一

矢守麻奈

本年5月の第7回日本言語聴覚学会(金沢市)においては、200題を超える発表と活発な質疑応答が行われました。ポスター、演題とも年ごとに量も質も充実してきていると感じさせる学会となりました。学会での発表をまとめ投稿された論文も、講演やシンポジウムの内容とともに今後、本誌に掲載されることになります。

言語聴覚研究第3巻2号をお届けします。

本号の原著論文は2編です。1編は、重度の呼称障害を呈した伝導失語の患者に、訓練語を構成する仮名1文字を選択し配列して音読するという語の構成訓練を行ったものです。もう1編は書字障害を呈する軽度の発達障害児に対しキーワードを用いて音韻処理過程から文字形態想起を行う訓練の報告です。いずれもその訓練効果を単一事例研究デザインによって検証しています。特定の対象に特定の訓練を用いることの多い言語聴覚士にとって単一事例研究デザインの利用はevidenceの蓄積の面からも重要なことです。短報では2~4歳の健常児を対象とした語想起能力の発達について検討した結果が報告されています。健常児の言語発達についてもさらなる資料の集積が望まれるところです。またリポート「現場、最前線」は、エレクトロバタログラフィー(EPG)について、視覚的フィードバックが有効な訓練として見直そうとする活動に関するもの、またNICUにおいて新生児期から言語聴覚士が関わっている実践報告の2つが取り上げられています。

調査報告も2編あります。1編は言語聴覚士が対象とすることの多い運動障害性構音障害について、臨床の場で実施される評価に関するアンケート調査の結果が報告され、スタンダードとなる検査の開発、情報の共有化、また実態の把握の必要性が指摘されています。もう1編は平成18年度の医療保険ならびに介護保険の改定の影響に関する調査報告です。本年度の改定は近年になく大幅なものでした。取得している施設基準の内容の変化や言語聴覚士数の変化など、医療保険施設、介護保険施設それぞれについて、改定が言語聴覚士の業務に及ぼした影響に関するアンケート調査を行った結果が報告されています。言語聴覚士を取り巻く環境はめまぐるしく変化しています。その中で新しい知見を取り入れながら質の高い臨床を日々、続けて行くことが言語聴覚士に求められています。

(立石雅子)

言語聴覚研究(第3巻 第2号)2006年7月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒160-0023 東京都新宿区西新宿 8-5-8 正和ビル 304

(☎03-5338-3855 FAX 03-5338-3856) <http://www.jaslht.gr.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Showa-Build. #304, 8-5-8 Nishishinjuku Shinjuku-ku, Tokyo, 160-0023, Japan

©2006, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 5-24-3(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)医薬広告社 ☎03-3814-1971(FAX 03-3814-8915)